

早稲田大学大学院社会科学研究科

# 博士学位申請論文審査要旨

申請学位名称	博士（学術）
申請者氏名	外村 江里奈
専攻・研究指導	地球社会論専攻 社会哲学研究指導
論文題目	現代医療と生命倫理の哲学的基礎に関する考察 A Study of Philosophical Fundamentals of Modern Medicine and Bioethics
論文副題	「脳死・臓器移植医療」および「尊厳死」を事例として as a Case of 'Brain Death on Organ Transplantation' and 'Death with Dignity'

審査委員会設置期間 自 2014年10月16日  
至 2015年1月15日

受理年月日 2014年10月16日

審査終了年月日 2015年1月15日

審査結果 合格

審査委員	所属	資格	氏名
主任審査員	社会科学総合学術院	教授	田村 正勝
審査員	社会科学総合学術院	教授	那須 政玄
審査員	社会科学総合学術院	准教授	横野 恵
審査員	自治医科大学医学部	准教授	野尻 英一

現代医療と生命倫理の哲学的基礎に関する考察  
---「脳死・臓器移植」および「尊厳死」を事例として---

(一) 本論文の概要

(1) 本論文の問題意識と目的

近年の科学技術の発展、とりわけ過去数 10 年の生物医療科学技術 (biomedical science and technology) の急速な発展にともなって、以前は不可能であった医療行為が可能になった。たとえば、それは「出生前診断」や「先端生殖技術」あるいは「臓器移植」や「胃ろう造設術」などである。こうした医療技術の発展は「生の可能性」を拡大し、命を救うがゆえに積極的に進められる。

しかし医療技術の発展は同時に、新たな問題を生み出す。なぜなら生命科学や医療技術の発展によって、「臓器の交換可能性」や「身体機能の再生可能性」が拡大し、「生命への人為的な介入」が促進されるからである。

たとえば、1950 年代末頃から発達した人工呼吸器により出現した「脳死」は、臓器移植という目的に応じて「死の定義」を変化させ、「死の判定基準」を細分化している。他方で「尊厳死」や「安楽死」は、一様に身体的機能の停止を引き延ばす「執拗な延命治療」に抗する要求として、1970 年代頃より出現した。

このように現在、医療における「生死の境界線」は、技術的処理の可能性という観点に大きく左右され、規定されている。つまり、「よりよい生」をおくるために用いられるはずの医療技術が、「生命への人為的な介入」を促進し、「生と死のゆらぎ」を惹起している。このような「生と死のゆらぎ」は、「人間存在そのもののゆらぎ」である。さらにこれは、自然に対する畏怖の念をゆるがし、「生命の尊厳」の侵害をも意味する。

したがってわれわれは、「生命の本質」を見失うという「危機」に直面している。それゆえ現在、生命倫理に関する諸問題を本質的にとらえるために、「全生命過程」を包摂する《自然の根源的な生命の流れ》に即して「生」や「死」を問う視点が要請されている。

ところが本来、生命あるいは生き物の倫理を問う「学」であるはずの「生命倫理」は、その役割を十分に果たしてはいない。生命倫理学は 1960 年代から 1970 年代の米国で生まれたが、現在の生命倫理は、「作法」や「エチケット」という意味合いが強い。そしてそこにおける議論の重点は、「社会的コンセンサス」や「政策的な許諾」にある。そのため今日の生命倫理は「医療倫理」として、各人の個別的な状況と医療行為とを調整する機能にとどまる。ゆえに《自然の根源的な生命の流れ》という視点は考慮されていない。本論文は、これを問題の根本に据えている。

以上の問題意識から本論文は、社会哲学の視座から現代医療や生命倫理のあり方を問い直し、《自然の根源的な生命の流れ》に根ざした人間のあり方を探る。とくに日常生活をも規定している「近代的な思考枠組み」を、社会哲学の視座から検討し、生命倫理をめぐる諸問題を通じて、他者との関係性や社会のあり方を問い直している。

## (2) 本論文の課題と方法および意義

本論文の課題は、まず、現代社会が直面する「危機」、すなわち「生命の本質」を見失うという「危機」の意味を、社会哲学の視座から多角的に把握し、それを根本的に解明することである。次にこれを踏まえて「危機」を転換する方途を探ることである。

第一に、一定の枠組みで覆われた社会のあるがままの姿を洞察し、そのあり方を多角的に検討する。これは、社会現象の因果論的把握である。

第二に、他者や世界との関係性の現われである「現象の意味の構成過程」とその基底との関係性を明らかにする。そしてそれによって、「いのち」をめぐる「出来事」に立ち現れる「倫理それ自体」の生成過程を問い直す。つまり事実と問題に即して、「現象の学」および「形而上学」によって捉えた「意味連関」に基づいて、社会現象を多角的に把握する。

第三に、これらによって把握した「危機」を転換するために、社会哲学的思考に基づいて、現代医療や生命倫理のパラダイムを転換する道筋を提示する。

以上のように本論文においては、既存の生命倫理を自明の前提とするのではなく、その自明性を問い、日常における「いのち」そのもののありを再考する。したがって本論文の試みは、社会における意味の構成と、意味の生成や構成を可能にする基盤の解明という根源的な次元へ至る問いを敢行し、そのうえで医療倫理と生命倫理のかけ橋を探求している。

以上の課題を、とりわけ脳死・臓器移植および延命治療と尊厳死・安楽死をめぐる問題を通じて、以下のように事例研究と理論的考察の二つの側面から検討する。

第1章において、脳死・臓器移植および延命治療と尊厳死・安楽死の現状の分析をし、現代医療と生命倫理の問題点を明らかにする。そして、それにもとづいて問題提起を行う。

第2章では、第1節において現代医療や生命倫理の背景にある思想や人間観を確認する。つづいて第2節と第3節において、近代的な思考枠組みの本源を明らかにし、それを解体する契機を、フッサール(Edmund Husserl 1859-1938)とクザーヌス(Nicolaus Cusanus 1401-1464)の思想より検討する。

第3章および第4章において、フッサールとハイデガー(Martin Heidegger 1889-1976)およびクザーヌスの思想による理論的考察を行う。その主な論点は、世界の「相依相属的な関係性」と人間の「主体性」、また、意味の生成や構成を担う人間と世界との関係性、およびこれらとその基盤としての「自然の根源的な生命」との関係性についてである。

第5章は、これらの考察を踏まえ、QOL、SOLを「生命倫理」の視点から再考する。この様な本論文の意義は、社会哲学の視座から、社会における医療のあり方や医療倫理化した従来の生命倫理を再考し、生命倫理における新たな視座を目指し、その獲得

に貢献するところにあると言える。

さらに、N・クザースの思想とE・フッサールおよびM・ハイデガーの思想の差異と類似性を検討することによって、三者の思想の現代的な意義を明らかにし、西洋哲学史における重要な視座を明示している点が評価できる。

## (二) 本論の目次

序文

### 第1章 生命倫理と「生と死のゆらぎ」

#### 第1節 生命の客体化と形式化

第1項 脳死と結合した臓器移植

第2項 延命治療と各国における尊厳死・安楽死の動向

第3項 生命の商品化——身体の「モノ」化と交換可能性の拡大

#### 第2節 生命倫理の医療倫理化

第1項 生命の数量化と意味の軽視

第2項 生命倫理の基本原則について

第3項 自己決定をめぐる問題点

#### 第3節 生命倫理の限界と社会哲学の要請

第1項 近代的倫理観の特徴

第2項 現代医療と生命倫理の弊害

第3項 生命倫理の再考へ

### 第2章 現代医療と生命倫理に関する哲学的視座——その予備的考察

#### 第1節 現代医療における近代的認識枠組み

第1項 形式的合理性と「認識の貧困化」

第2項 近代的人間観の諸相

第3項 現代医療の背景にある機械論的心身二元論

#### 第2節 現象学的アプローチの特徴——近代的認識枠組みの解体

第1項 自明性への問いと超越論的現象学

第2項 近代科学の思考原理と「理念化」による二重の危機

第3項 「知のパースペクティヴ性」と脳死・臓器移植の意味

#### 第3節 「認識枠組み」自体の再考——クザース哲学に関連して

第1項 哲学史におけるクザース

第2項 クザースの認識論——測定と「臆測の術」

第3項 感性・悟性・理性——認識の成立根拠

### 第3章 クザース哲学の再検討——人間の知の有限性をめぐって

- 第1節 「知の原理」と「実在の原理」
  - 第1項 クザーヌス哲学の基底——「反対対立の合致」と「知ある無知」
  - 第2項 「類似化」による認識
  - 第3項 クザーヌスの「神」と知の有限性
- 第2節 「世界＝宇宙」の存在様相——クザーヌスのコスモロジー
  - 第1項 「縮限」概念について
  - 第2項 「世界＝宇宙」の対象化——ハイデガー『世界像の時代』から
  - 第3項 「世界＝宇宙」と個物の関係について
- 第3節 「実在の原理」と他者の要請
  - 第1項 「世界＝宇宙」の重層性とその意味
  - 第2項 「真理」の分有とその認識
  - 第3項 「真理」の希求と他者の介在——知と実在の交差
  
- 第4章 人間存在と技術の意味——「主体性」をめぐる現象学的視座
  - 第1節 近代的人間観の再考——クザーヌス哲学の現代的意義
    - 第1項 人間の「主体化」——近代的ヒューマニズムの成立
    - 第2項 「視点」の確立——宇宙像の転換を契機として
    - 第3項 「世界＝宇宙」の調和性と「マイクロコスモス」としての人間
  - 第2節 意味・身体・他者——フッサール現象学の射程
    - 第1項 「意味」としての世界と身体の役割
    - 第2項 世界の受容と自他の等根源性
    - 第3項 不可視なものの顕れとしての「意味連関」
  - 第3節 「真理」を開示する技術と人間の役割——ハイデガーの技術論を手がかりに
    - 第1項 技術の本質と人間の知性
    - 第2項 近代技術における「真なるもの」と「真らしきもの」の混同
    - 第3項 「人間存在の危機」と現代医療の根本問題
  
- 第5章 生命倫理を超えて——QOL、SOL概念の再考を通じて
  - 第1節 物語としての「生命の質（QOL）」
    - 第1項 「延命」の自明視と現象学的時間論
    - 第2項 「生き生きした時間」と「生命の質」
    - 第3項 意味論から見た緩和ケア——医療を超えた「価値共有の場」
  - 第2節 「生命の尊厳（SOL）」の哲学的基礎づけ
    - 第1項 「人間の尊厳」に関する諸見解
    - 第2項 生命の尊厳と贈与——臓器移植の倫理観をめぐって
    - 第3項 「自然の根源的な生命」という視座

### 第3節 日常における「いのち」の再考

第1項 「いのち」の本質的契機としての死

第2項 「人間の尊厳」の在り処

第3項 生命の結晶化とその輝き——他者と死とともにある生

結語

## (三) 本論文の内容

### 序文

序文において、本論文の問題意識や目的、さらに論文の構成と課題に対するアプローチの方法が示される。

### 第1章 生命倫理と「生と死のゆらぎ」

本章においては、現代医療と生命倫理に通底する近代的な思考枠組みを検討し、その限界を明らかにする。そして、この考察にもとづいて問題提起を行い、本論文の課題を明確にしている。

第一に、客体化と形式化という観点から、現代医療における生と死の現状を分析する。具体的には、まず「脳死・臓器移植」および「延命治療」と「尊厳死」「安楽死」をめぐる生と死の現状を分析する。この現状分析から、医療において「生と死の境界線」が技術的処理の可能性によって規定され、「生命への人為的な介入」が促進されている点が明らかになる。つぎに、生命の客体化と形式化の象徴的な事例として、「身体の商品化」を検討する。ここでは、生命科学技術の急速な発展と新自由主義的な市場原理とが結合して、「生命の商品化」現象を惹起していることを指摘する。

第二に、生命倫理の基本原則を概観し、個人主義的自由主義にもとづく生命倫理の問題点を明らかにする。とくに自己決定をめぐる問題点を中心に検討する。またここでは、今日の医療や生命倫理のパラダイムによる本質的な弊害を検討するために、「現代医療」と「生命倫理」の背景にある「近代的倫理観」を確認している。

以上の本章の考察から、生と死の医療化によって「生命の人為的介入」が促進され、「生と死のゆらぎ」が生じていると問題を提起する。さらに、この「生と死のゆらぎ」こそが、人間存在の「危機」のみならず、人間存在の基底である「自然全体の生命」の「危機」であるという問題を提起している。

### 第2章 現代医療と生命倫理に関する哲学的視座——その予備的考察

本章では、第1章で明らかになった「危機」を根本的に解明し、現代医療や生命倫理における支配的なパラダイムを転換するための基礎的な考察を行うことである。

なお前述のとおり、第2章第2項から第4章にかけては、フッサールとハイデガーの思想をてがかりに近代の特質を解明し、さらに近代の認識枠組みを転換するために、ク

ザークス哲学を中心に「認識のフレームワーク」の再検討を試みる。

第一に現代医療における認識枠組みを検討し、その背景を確認する。とくに、M・ウェーバー (Max Weber 1864-1920) がとらえた「形式的合理性」と「実質的合理性」に着目し、生と死の医療化を促進した「科学的・合理的な思考」と「認識の貧困化」について検討する。現代医療においては、「目的に対する手段の合理化」の没価値的な「形式的合理性」が追求され、それが「価値判断」に影響を及ぼしていると主張する。

このような現代医療における「認識の貧困化」および、その思考枠組みを本質的に理解するために第3節では、「科学的・合理的な認識」にもとづいて形成された「人間観」の特徴や、現代医療の背景にある「機械論的心身二元論」について検討する。それは、人間理性の絶対化、欲望追求の自由による「無限への衝動」、さらに「数量主義」などによって形成された近代的な人間観である。

第二に、事象や現象の背後関係にある「意味連関」を捉えるために、フッサールの現象学とクザークスの哲学に依拠して、「意識作用」および「認識」の本質的な働きを確認する。とくにフッサールの『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』を中心に、近代科学の思考原理の本源を反省的に考察し、「知のパースペクティヴ性」という射映性を明らかにする。さらに、それによって脳死・臓器移植の背後にある「意味」を捉え、現象学的アプローチの意義を明示する。

第三に、フッサールにおける「知のパースペクティヴ性」を、クザークスの思想に遡って検討し、「測る」という人間の認識の基本的な作用を考察する。そして、認識における知性すなわち、感性、悟性、理性の総合的な働きを明らかにし、ここに、分析的・合理的な悟性認識を偏重する近代特有の思考を反省する契機を見出す。

ところで本論文が、フッサールとクザークスの思想に遡って、現代医療や生命倫理の問題を検討する理由は、以下の点にその反省の契機が見出せると考えるからだ。

先ずフッサールが、科学技術の発展にともなって、実証科学的な認識が日常生活をも規定している点を問題視し、「認識における意識作用」を解明した点に着目している。

また近代的思考の萌芽といわれるクザークスの思想の「科学的・合理的な認識と相違する知の働き」に着目している。以上の点をふまえて、「測る」という「人間の認識の基本的な作用」を問い、近代科学の思考原理および、それを相対化する認識の本質的な働きを考察している。

### 第3章 クザークス哲学の再検討——人間の知の有限性をめぐって

第3章は、クザークス哲学の再検討を中心にしているが、とくにハイデガーの思想をてがかりに「近代的主体性」を解明し、さらにそれを反省し、「現代医療」や「生命倫理」のパラダイムを根本的に転換するために、クザークス哲学を検討する。

ここで、ハイデガーとクザークスの思想に依拠した理由は、以下の点にある。第一にハイデガーが、近代の認識枠組みと人間存在のあり方を反省し、本来的な人間のあり方

を探究し続けたという点であり、第二にクザーヌスが中世と近代のあいだに立ち、人間の知の限界と存在としての可能性を明らかにしたという点である。

このような点を踏まえて本章の考察を通じ、前章であげた「知のパースペクティヴ性」の所以と、現象を現象として成立させる「意識の働き」とを、より本質的に理解することを目指す。

第一に、クザーヌスの思想において基礎的な概念である「知ある無知」や「反対・対立の合致」に依拠して、世界の重層的な関係性における「知の原理」と「実在の原理」を検討する。その焦点は「世界と人間の関係性」ならびに「個物と個物の関係性」という点から、「知性の特質」と「人間の本来的な存在様式」を確認することである。

第二に「世界像」の出来に関連する人間の主体性について、ハイデガーの『世界像の時代』を手がかりに近代における主体性の特質を確認する。ハイデガーの「近代の本質は、人間の主体化」であり、「人間の主観」によって「世界像」を結ぶという視点の端緒を、クザーヌスの思想に見る。

クザーヌスは、そのような近代的主体性を問題とし、「縮限」という概念を主張したが、本章ではこれに着目する。すなわち「近代的主体性」に代わる視座として「縮減」を取り上げ、そこに近代における「人間理性の絶対化」や「人間中心主義」を反省する契機を見出す。

第三に、上記の点を詳細に検討するために、クザーヌスの「縮限」概念から世界の重層的な相依相属関係を明らかにし、世界を成立させる根拠との関わりから人間の本質的なあり方を検討する。この考察から人間の認識能力の限界と、あらゆる存在と関わりながら「真理」を志向して生きる人間の可能性を明らかにする。さらに、ここに、代医療や生命倫理のパラダイムを転換する方向性示唆している。

#### 第4章 人間存在と技術の意味——「主体性」をめぐる現象学的視座

本章においては、第3章の「主体性」の検討をふまえて、真理を開示する人間の役割をあらためて検討する。

これまでの考察および本章を通じて、「人間と世界の関係性」およびその基底である「自然の根源的な生命」との関係性という視点から、人間の役割を考察している。すなわち、「知のパースペクティヴ性」を有する人間は、「マイクロコスモス」として、宇宙の二つの行為を同時に担う存在だという。すなわち人間の「知といのちの行為」が、「自然の根源的な生命の流れ」と「世界の意味連関の持続」とを、世界とともに巡らせると主張する。

人間は一方で、「自然の根源的な生命の流れ」を根拠として、「いま、ここ」において「存在-非存在」「意味-非意味」「生成-消滅」などあらゆるものを含蓄して現出している。他方で人間は時空間にもとづき、「意味をおびた世界」を現出させなければならないという。



このように人間は、「自然の根源的な生命の流れ」のなかに在り、あらゆる存在を意味世界に取り込んで「いのち」という意味を展開している。したがって、「意味世界」と「自然の根源的な生命の流れ」は無縁ではない。

第4章では、このようなクザーヌスのコスモロジーにもとづいて、全生命過程の一部として存在する人間のあり方を問い直し、「宇宙（世界）像の転換」を導いた「近代的ヒューマニズム」と「クザーヌスの思想」との比較検討から、人間の「主体性」を再考する。

さらに「自然の根源的な生命」という基底を根拠に展開される意味世界の様相を、フッサールの思想から検討する。そして人間は、自我意識や認識作用、あるいは身体の運動性以前に、「すでにいつも」世界のありとあらゆる関係性のうちに存在するという根源的事実を指摘する。

他方でハイデガーの『技術論』を手がかりに、現代医療や技術の根本的な問題と、そこにおける人間存在の「危機」を明らかにする。ここでは近代技術において、「真理」と「社会的に正当とみなされているもの」が混同され、人間自身はその存在の本質を見失うという「危機」を指摘する。それはハイデガーにしたがって、「真理」との断絶を意味する「危機」だと言う。

ハイデガーの技術をめぐる洞察を応用して、今日の医療および生命倫理を次のような危機に陥っていると言う。第一に「一元的な思考に」より二律背反に陥り、「他者の臓器を移植しなければ、生き長らえられない」あるいは「死によってしか尊厳を保つことができない」と、思考が制限されていることの危機、第二に、そのように思考が制限される事態に対して、気づくことができず、問い自体を忘却しているという危機、これらの2つの危機を問題としている。

こうした「危機」は、第2章で考察するフッサールがとらえた「理念化」による「二重の危機」とも重なり合うという。それは、人間が記号的・数学的理論という「理念の衣」に覆われており、科学的な世界こそが「真に客観的な」唯一の世界であると思いつくことよって惹起される「危機」だと言う。要するにこれらの問題に対する「意味付与」を問題にすべきであるが、その問い自体を喪失している人間の「危機」だともいう。

ここで「危機」とは、それを転換する分岐点であるということであるが、現代医療や生命倫理のパラダイムを転換するために、われわれ自身の思考枠組みを解体し、再構築しなければならないと言う。

## 第5章 生命倫理を超えて——QOL、SOL概念の再考を通じて

第5章では、事例研究を通じて明らかになった問題点を、これまでの理論的考察にもとづいて、あらためて社会哲学的に基礎づける。とくに「生命の質 (QOL: Quality of Life)」および「生命の尊厳 (SOL: Sanctity of Life)」概念の再考を通じて、以下の点から日常における生命の本質的なあり方を提示する。

第一に、われわれの生命が、他者との関係性および、その基底である「自然の根源的な生命」との関係性においてあるという点である。第二に、「生の一部としての死、死があるゆえの生」という「生命の本質」とその契機としての死という点である。

本章では、第一に、QOLを再構成する視座を提示している。とくに、現象学的時間論から内在的な時間意識を明らかにし、「いのち」という時間を他者とともに織り成すという「物語としての生命のあり方」を検討する。そして、次のことを主張している。

QOLの構成要素として、「人生において生と死をいかにとらえ、他者と共にどのような意味連関を織り成そうとしているか」という点を含む必要があるということである。以上の主張から本論文では、「緩和ケア」を事例として取り上げ、医療を超えた「価値の共有の場」の重要性を示す。

第二に、「生命の尊厳」という視点から、尊厳の本意を明らかにする。とくに、脳死・臓器移植における生命の自己所有をめぐる事例を通じて、「自然の根源的な生命」にもとづく「各人の代替不可能性」という尊厳の本意を明らかにしている。

それは、「人間自体の価値は計量できず、各人は相互に置き換えられない存在である」という「かけがえのなさ」である。こうした考察を通じて、第1章で問題提起した「生命の手段化」を解体する視座が提示される。

第三に、日常の意味世界における生命のあり方を再考し、そこにおける自明性を問い直す。その際に「人工呼吸器取り外し事件」（2006年3月25日）という尊厳死事件を事例として取り上げ、「いのち」の本質的契機としての死を検討する。ここで「生の一部としての死、死があるゆえの生」という生命の本質的あり方、および「他者とともにある生と死」という日常の「生」のあり方について考察している。

以上のように本章では、QOLとSOL概念の再考を通じて、「生命の質」と「生命の尊厳」の本来の意味を明確にし、その再構成を試みる。それは一回性・唯一性というかけがえのない「いのち」を、自身の生と死として授かり、他者とともに「いま、ここ」を生きるという「生命の質」について論じている。また、他者との関わり合いのなかで、豊かな「いま、ここ」を生ききるさなかに生起する「生命の尊厳」について論じる。

以上の考察を通じて次の点が明らかにされる。すなわち、あらゆる存在は「存在一非存在」を超えたいずれのものでもない、という根拠によって存在し、さらに、あらゆる関係性においてのみ、一回的な私「があり」、唯一的な私「であり」、固有な私「として」在るということである。

このように人間は、自身によっては存在しえず、他者によって自身を認識するという「根源的受動性」によって生かされて在る。こうした根源的受動性によって各人は、限りある生と死を他者とともに生きることにおいて「尊厳」を見出すことが可能であるという。

結語

本論の全体を振り返り、あらためて現代医療や生命倫理のパラダイム転換の方位、すなわち日常における「いのち」のあり方を提示する。

#### (四) 審査公聴会の質疑応答

- 1) 論文の目的に「既存の生命倫理を自明の前提とするのではなく、その自明性を問い、日常における『いのち』そのもののあり方を問い直す」とあるが、この目的が達成されているか。

**【返答】**

既存の生命倫理は機械論的な生命観にもとづいているが、本論文は自然の根源的な生命という観点から日常の生命のあり方を問い直している。とくに日常性、すなわち他者との関係性を QOL (Quality of Life : 生命の質) および SOL (Sanctity of life : 生命の尊厳) と関連づけて問い直している。

- 2) なぜニコラウス・クザーヌスの哲学に依拠するのか。

**【返答】**

クザーヌスは中世と近代の橋渡しをした人物であり、その哲学は西洋哲学の神髄を捉えている。とりわけクザーヌスは中世の神学のみならず、ギリシャ哲学の神髄をも捉えているからである。

- 3) バイオエシックスはキリスト教世界から生まれ、神を前提としている。そのため宗教意識が弱い日本人には、バイオエシックスは馴染まないのではないか。

**【返答】**

本論文は、神よりも普遍的な生命の根源的な流れから生命倫理を捉え直すものである。また、本論文における SOL は、「生命の尊厳」という一般の訳語にしたがったが、自然の根源的な生命の流れであるところの「神聖性」を主張するものである。以上から神を前提にしない、根源的な自然にもとづく人間の在り方という点から生命倫理を捉えることが可能である。

- 4) 現在、生命倫理をめぐる問題は、キリスト教世界を中心に安楽死、自殺、選択的中絶が議論になっているが、尊厳死・安楽死や脳死・臓器移植を事例にあげた理由は何か。

**【返答】**

上記の問題は重要であるが、尊厳死・安楽死や脳死・臓器移植もきわめて今日的な問題である。それらは、今後、技術のさらなる発展にともなって、より重要性を増す問題であると考えられるからである。

- 5) QOL と SOL の関係性を明確にする必要がある。

**【返答】**

SOL は神を用いて説明しなくても、「自然の根源的な生命」によって、より一般的に説明することが可能である。また本論文は、こうした SOL にもとづく QOL を、他者との関係性において捉えることを主張するものである。

- 6) 生命倫理と宗教との関係をより詳細に言及する必要があるのではないか。

**【返答】**

本論文は、生命倫理と宗教が成立するための根本を「知」と「存在」という点から明らかにした。

7) 哲学と社会哲学の違いが明確ではないのではないか。

**【返答】**

本論文は、具体的な社会問題との関係で、QOL や SOL に光を当てている。とくに新自由主义的な市場主義経済の流れからの「臓器の商品化」などの問題点を把握し、現在の QOL や SOL を検討している。こうした考察は哲学に止まらない社会哲学の視点である。

8) フッサールの現象学では、近代的な認識に止まるのではないか。

**【返答】**

フッサールは、とくに後期にみられるように、世界の基盤としての「大地」にもとづく意味構成を明らかにした。それゆえ、フッサールにおける意味は、単なる個人の主体的な意味構成や意識作用だけに拠るものではない。またこの意味構成が根源的な自然につながる重要な観点である。

9) 「生と死のゆらぎ」や「人間存在のゆらぎ」など、「ゆらぎ」という語句がネガティブな意味合いで用いられているが、本来「ゆらぎ」はポジティブな意味ではないのか。

**【返答】**

近代的・合理的な思考枠組みにおいては、「ゆらぎ」という語句はネガティブな意味である。しかし本論文は、むしろ、そうした「ゆらぎ」を通じて生命のポジティブな関係を明らかにするものである。

10) 第5章の現代生命倫理に対する批判は適切であり有効であるが、「知のパースペクティブ性」が知の全体的包括性を意味しているのならば、より分かりやすい語句があるのではないか。

**【返答】**

本論文における知のパースペクティブ性は、現象に関するパースペクティブのみならず、現象の背後にある存在論的な意味をも含めた見方、視座として使用している。このような「現象に関する包括知」だけに止まらない最広義のタームとしては、「パースペクティブ」が適切だと思われる。

## **(五) 総合評価**

### **(1) 着眼点と独創性について**

先端医療の重要な問題、臓器移植、脳死、尊厳死といった現代的な問題を、倫理的ならびに社会哲学的な観点、とりわけ「生命倫理」との関連に着目して考察している点など、着眼点および独創性に優れていると言える。

### **(2) テーマ設定の妥当性、重要性について**

医療問題における哲学的考察の重要性を認識し、「医療倫理」と「生命倫理」を相互依存的に考察している。生命倫理を軸として「医療倫理」を考えるという、従来で

はなされなかった試みとして評価される。

**(3) 論文構成の妥当性について**

本論文は5章からなり、まず生命倫理と医療の現状からはじまり、2章では現代医療や生命倫理の背景にある思想や「人間観」、ならびに「近代的な認識の枠組み」と特質を確認する。そして3章と4章で近代的認識の問題点をクザーヌスおよび現象学によって検討し、「自然の根源的生命」と「個人の生命」との関係を考察する。最後の章では、以上の考察を踏まえて、生命倫理と「QOL」および「SOL」の関係を考察している。

このように本論文は、起承転結が適切になされている。とりわけ、死と生を包括的に考える点など、斬新な展開が評価される。

**(4) 先行研究のサーベイを踏まえた専門分野の貢献度について**

プラトン、クザーヌスからフッサールの現象学に至る哲学的議論について関連分野の適切なサーベイを行っている。ラテン語の原著にもあたるなど、サーベイが丁寧、適切になされている。

**(5) データに裏付けられた実証性について**

医療の実態ならびに哲学的論述の双方が、先行文献研究に裏付けられた実証性を包含している。

**(6) 論旨展開における論証力、説得力について**

ラテン語の原著にあたるなど、論述は厳密であり、また論文全体の構成が明確である。本論文は、これらの諸点から説得力に富む。

**(7) 専門用語や概念の使い方について**

重要な思想研究は、逐次引用して丁寧に解釈しており、概念の使用も的確である。

**(8) 引用の仕方、注の付け方、資料の利用の仕方などについて**

引用箇所は、原著、邦約書双方の出所を明記する等、慎重かつ適格になされている。

**(9) 独自性、学際性、実践性について**

現実の医療に関する重要な問題として、医療のみの問題でなく哲学、倫理の問題として考え、哲学、倫理、医療をつなぐ考え方を提案しており、その学際性が評価される。またとくに「延命治療」の妥当性、「堕胎の妥当性」を生命倫理から検討している点は実践的と言える。

**(10) 論文全体の卓越性について**

発想の独自性と学際的な考察、関連文献の広範囲な渉猟、医療倫理と生命倫理と懸け橋を目指す考察、さらには西欧哲学史に新たな視座を求めるなど、卓越した論文となっている。

本論は以上のように「医療技術の進歩」という具体的な問題と、「自然哲学や生命倫理」という、ある意味では抽象的な論考とを結ぶ困難な考察であるから、いっそう

体系的に論じた方が良い部分も見られる。しかしクザーヌス哲学の再考など、近代社会の「思考パターンと思考内容」に対する本質的な問題提起や、「現代医療と生命」に関する部分については、説得的に論述している。

これらの諸点において、十分な考察と究明を行った論文として、「本論文は博士(学術)の学位を受けるに値する」と、審査員全員で判定した次第である。

審査委員

主任審査員 早稲田大学社会科学総合学術院教授

審査員 早稲田大学社会科学総合学術院教授

審査員 早稲田大学社会科学総合学術院准教授

審査員 自治医科大学医学部准教授

経済学博士 早稲田大学

博士（学術） 早稲田大学

田村 正勝

那須 政玄

横野 恵

野尻 英一